学園クオリディア

バリャス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今放送中のクオリディア・コードの趣味ｓｓです。

主人公も自分趣味で霞君になってます。

要注意←

原作完全無視、アニメ設定も完全無視なので気をつけてください。

原作ほぼ未読なのでキャラはＷｉｋｉから引っ張ってきてます。つまりキャラ崩壊

自分の他のｓｓよんでくれた方は分かると思いますが気まぐれ投稿です。モチベが上がらないと書けない体質なので申し訳ないですが。

以上、小説と呼べない代物かもしれませんが楽しんでくださると嬉しいです。

目次

呼び出し　1
夢　33
ラブコメ　54

呼び出し

千葉県とある住宅街の一軒家。

俺こと千種霞は制服に身を包み、今朝配達されてきた新聞を広げながらコーヒー（超甘い）を啜っていた。

「はぁ～ぁ」

あくびをしながら今の時刻を確認する。時計は１９時００分を指していた、そろそろ明日葉を起こさないとな。

明日葉というのは俺の妹の名前で、現在この家で一緒に住んでいる。父の行方は知れず、母はなぜか海外に飛び出している。

母の方に関してはたまに帰ってくるのだが、なぜ海外に行っているのかは聞いても誤魔化してくるためよくわからん。

俺は新聞を畳み、朝ごはん用に食パンを焼こうと立ち上がる。

「そう言えば食パンまだあったっけ？」

我が家のパン置き場を確認すると、ギリギリ今日の朝飯分は残っていた。

「今日の帰りに買って帰らないとな」

俺は食パンをトースターに入れ、出来上がるのを待つ。
待っている間、明日葉用のホットココアを作るためカップを食器棚から取り出そうとした時、リビングの扉が大きな音を立てて力強く開けられた。
「ちょっとお兄い、今日は朝練があるって言っといたっしょ！」
妹の明日葉はリビングに入ってくるなり特徴的な赤いロングヘアーを揺らしながら俺に八つ当たりをしてくる。
「明日葉ちゃんの部活って水曜日は朝練ないんじゃなかった？」
俺は一応明日葉に確認を入れる。
まあこれはココアを飲んでる時間もなさそうかな？と思い食器棚からカップを出すのをやめた。
俺は今朝事前に作っておいたお弁当を包んだ袋を二つ（自分と明日葉用）手に持ち、リビングの机に置きながらカレンダーを確認する。
曜日は間違いなく水曜日。
明日葉は陸上部に所属しておりほぼ毎日朝練があるわけなんだが、水曜日だけは朝練がない曜日だ。
「いやだからもう直ぐ大会だし水曜日も朝練あんの」
「そうなの？でもお兄ちゃん初耳だと思うんだけどなぁ」

トースターが「チンっ」と音を鳴らしたため、俺は焼けた食パンをトースターに取りに行く。

「あっ、ていうか時間ないし今日は朝ごはんいいや！」

明日葉はそう言うとお弁当箱を「二つ」鞄に突っ込み、開けっ放しになっていた扉から飛び出していった。

「片方はお兄ちゃんのだったんだけどな…」

俺は食パンを手に持ちながらぼそりとつぶやく。ただもうこの場には当の本人がいないため、俺の言葉を無意味に空へ消えていった。

突然だが俺はクオリデ学園という高校に通っている。もちろん妹も同じ高校だ。ちなみに俺は三年生で妹の明日葉は一年生。

そんなわけで俺はいま学園に向かうために通学路を歩いている。

クオリデ学園はかなり規模が大きい学園で、文化祭とか大勢の人でかなり賑わう、まあいろいろ問題も起きるんだが。

部活などにもかなり力を入れていて、スポーツ推薦も多く取り扱っている。明日葉もスポーツ推薦入学した一人だ。俺？俺は残念ながらスポーツは得意な方ではないため一般入学している。

「あっ、かすみんだ」
　よく聞き慣れた声が急に聞こえてくる。　俺のことをその名で呼ぶのは一人しかいない。
　俺は足を止めず声のした方に顔だけ向けた。俺の視線の先にはよく見知った人物が二人歩いている。
「おっはよう!」
　挨拶をしながら二人は俺の方へ歩いてきたため、俺は「ああ」と小さく返事をする。
　少し背が小さい銀髪ツインテール、そして無駄に明るい我らの学園の生徒会長様、クオリデ学園三年生の天河舞姫と、
「お前はもっとシャキっとできないのか?仮にもうちの学園の生徒だろう」
「いや、シャキっとしてる俺なんて俺じゃないまであるし」
　そして黒髪ポニーテールで天川大好きっ子、同じくクオリデ学園三年生、生徒会副会長の凛堂ほたるだった。
「相変わらずだなお前は、姫の面目だけは潰すなよ」
　凛堂は見た目真面目そうだが、1に天河、2に天河のストーカー紛いの女だ。天河に近づく男は凛堂に切り捨てられるとか噂が立つレベルである。本当に切り捨ててないよね?

「あれ？水曜日なのに明日葉ちゃんは一緒じゃないんだ？」
天河が不思議そうに聞いてきた。天河の言う通り水曜日はいつも明日葉と登校している。というより陸上部の朝練がなければいつも一緒に登校してるけど。
「もう直ぐ試合らしくてな」
それだけ聞くと天河は察したようで、うんうんと頷く。
「そっか、もうそんな時期だったね。それにしても一年生なのに明日葉ちゃんはすごいね」
「そうだな、俺なんかと違って明日葉はすごい。そして可愛い」
控えめに言って天使ですね。明日葉ちゃんまじ天使。俺が一人納得していると、なぜか若干引いている様子の凛堂が口を開ける。
「貴様は昔から変わらないな。そのシスコンっぷりも」
いや、お前の天河に対する執着と比べたらマシだ。マシだよね？
俺は言い返そうと口を開けようとしたが、それより先に凛堂のほうが言葉を発する。
「あと自分自信の評価の低さもな」
それを聞いて俺はバツが悪そうに咳払いをする。そんなこと言うのお前らぐらいなんだよ。
「むしろお前らが過大評価しすぎなんだっつーの、俺は底辺層の住民だ」

人の悪いところばっかに目がいって、そして勝手に距離を置く。俺みたいなやつはろくな人生を歩めないだろう。そんなことを考えていると天河が俺の肩を叩いてきた。
「そんなことないよ、かすみんは優しいじゃない、もっと胸を張りなよ」
「それにクオリデ学園のAランククラス所属の風紀委員長がそんな情けないこと言っちゃいけないよ！」
そう言うと、天河は屈託のない笑顔で笑いかけてくる。
俺は無意識に笑顔の天河から顔を背けた。
いや仕方なくない？人から褒められるのに慣れてないんだもの。
「はあ、あんまりおちょくんなよ。一応風紀委員長様なんだけど」
「私は生徒会長様だから風紀委員長をおちょくっても許されるのである」
天河は腰に手を当て、「わーっはっは」と笑った。俺はその姿を横目に少し歩く速度を上げ、二人から逃げるように進む。
「じゃあ逃げるが勝ちだな」
二人は追いかけてくるわけでもなく「じゃあ後でねー」と天河の声だけが届いた。

風紀委員長。そう、それが俺の学園でのポジションだ。
先ほども言ったが、うちの学園は大きく、スポーツ推薦やらなんやらでいろいろなや

つがいる。
なので風紀を乱すやつもいるわけだ。ちなみに生徒会長の天川も結構問題事起こすし要注意人物だったりする。
なんで生徒の模範になるべき生徒会長が問題を起こすんですかねぇ。
頭を抱えながら歩いていると、目の前に大きな門が見えてきた。
門にはこれでもかと言うような大きな字でクオリデ学園と書かれている。なんとも自己主張の激しい学園だ。
まあこの学園の理事長を考えると当然の結果なのだろうが。
「なんだ貴様ら」
俺がこの学園の行く末について不安を抱えている最中、俺の耳にえらく挑発的な発言が飛び込んでくる。
声がした方に視線を向けると、そこにはこれまたよく知った二人が学園の生徒達に囲まれていた。
おだやかじゃねぇなぁ、朝っぱらからこんな人目がつくところでなにやってんだ。
俺は生徒たちのネクタイを見る。
囲んでいる方は全員青のC、囲まれている二人は黄のAと黄のE。
ネクタイの色を見る感じ、二人を囲んでいる生徒は三年生と見受けられる。

うちの学園は一年生は赤、二年生は黄、三年生は青とネクタイの色が区別されている。さらにネクタイにはアルファベットが刺繍されているのだが、アルファベットの意味は後で説明することにしよう。

「なんだ貴様らじゃねぇよ、ぶつかってきたのはお前の方だろうが」

「Aランクだからって二年生が調子乗ってんじゃねぇぞ！」

どうやら俺の知り合いの方が彼らの一人にぶつかったようだ。

まああいつぶつかったくらいで謝ったりしないしな。

「ここは人通りが多い通路なんだからぶつかる事くらいあるだろう」

未だ高圧的な態度をとる二年生に、三年生達は明らかな苛立ちを見せる。その周囲は一触即発な雰囲気を醸し出していた。

「ちょっ、ちょっといっちゃん！あのっ、ごめんなさい！」

その雰囲気を察したのか、もう一人の女子生徒が頭をさげる。

いま頭を下げている女子生徒は宇多良カナリアという少女で、いつも笑顔をモットーとしている少し頭のネジがぶっ飛んでいるやつだ。

まあ頭はあれだが親しみやすいやつなので交友関係は広い。

そして宇多良にいっちゃんと呼ばれている男子生徒は朱雀壱弥。高圧的な態度が多いやつで、問題事をよく起こす。

朱雀本人に悪気はなく、これがまじでタチが悪い。
「いやあんたに謝ってもらいたいんじゃないんだよ」
二年生の可愛い女の子に頭を下げられ一瞬たじろいでいたが、三年生の方も引っ込みがつかなくなっているようだ。
俺は「はぁ」とため息をつきながら、彼らの元へ足を進める。
霞「あんまり朝から騒いでんなよ。さっさと教室に行け」
俺は彼らに近づき軽く注意をする。これでも風紀委員長様だからね！
「あっ霞さん、おはようございます！」
宇多良はいつもの笑顔で挨拶をしてくる。こんな時でも笑顔は忘れないんだな。逆に怖いわ。
俺が引いていると二人に突っかかっている男子生徒の一人が俺に声をかけてくる。
「あんたたしか風紀委員だったよな？あんたからも言ってやってくれよ。こいつ人様に思いっきりぶつかっておいて謝りもしないんだぜ」
三年生の男は風紀委員である俺にチクるように語りかけてくる。
そのスタンスはあまり気に入らないが、朱雀が謝るのが一番おだやかに事態が収まるのも事実か。
俺が朱雀の方を見ると朱雀は顔を背ける。

「ふん、謝る必要を感じなかったから謝ってないだけだ。なにか問題があるのか？」
はぁ、こいつは…。
確かに実際問題ぶつかったくらいでギャアギャア騒ぐ方もおかしいと思うが、ぶつかっておいてこう高圧的な態度をとるのもなぁ。
「うるせ、いいから一言謝っときゃいいんだよ」
俺は朱雀の頭を掴んで無理やり頭を下げさせようとすると、すぐさま後ろに体を引いて俺の手から逃れる。
「やめろ！なぜ俺が謝らなければならない！」
だめだこいつ。
俺がどうしたものかと考えていると、救世主がごとく俺たちに声をかけてくるやつが現れた。
「お前たちこんなところで固まってなにをしている？邪魔だから早くすすめ」
その声の主を確認すると、いままで動かなかった男子生徒達はその人物言う通りに「は、はい！」っと去っていく。
「ナイスタイミング、助かったわ」
俺はその女子生徒に礼を言う。その女子生徒は困ったような顔をしてこちらを見た。
困った顔をしていてもなお彼女にはオーラがある。

「助けたつもりはまったくないんだけど…」

助けるつもりもないのに人を助けちゃうなんてさすがです！風紀委員長とかやってみないっすか？

俺たちの元に声をかけてきた女子生徒の名前は夏目めぐ。カリスマ性で言えば生徒会長である天川の次くらいの能力は持っている。

彼女も風紀委員の一員で、俺よりも風紀委員長やってるんだよなぁ。ほんとなんで俺の方が風紀委員長なんだ。

実際彼女の方を風紀委員長と思っている人は少なくない。

単純に俺があまり目立たないため勘違いしている生徒もいるのだが、夏目のカリスマ性や行動から、リアルの風紀委員長である俺よりも夏目を風紀委員長と扱っている生徒が多いのだ。

カナリアが夏目に頭を下げてる光景を見ながら俺はまたため息をひとつついた。

はあ、朝からなんか疲れたな。

俺はようやく自分の教室へ向かって歩き始めたのだった。

そのあと昇降口まで歩いてきた俺は、靴を脱ぎ自分の下駄箱を開ける。俺は下駄箱の中を確認した後眼を細めた。

下駄箱の中には学校用の上履きが入っていた。むしろ入ってなかったらおかしいんだけどね。しかし問題は俺の上履き以外に見知らぬ手紙が入っていたことである。

俺は手紙を手に取り、差出人が書いてないか調べる。手紙の封筒には何もなし。中に書いてあるのだろうか。

それにしても俺に手紙とはどんな内容なんだ、不幸の手紙とかか？

いやいや、高校生にもなってそんなネタ今更やらんだろう。となると、風紀委員長の俺になにか頼みたいことがあって、直接は言いづらいから手紙でよこしたとかか？

考えても仕方ない。答えは手元にあるのだから手紙を開ければいいだけだ。俺は手紙の封を開け、中に入っていた紙を広げる。

「なにやってんだ霞？」

俺は突然声をかけられ、「うおっ！」とへんな声を上げてしまった。

「なんだ夏目か、びっくりした」

手紙に意識を集中していたせいか、夏目が近づいてきていることにきづかなかった。夏目は俺が手に持っている手紙を見ると、手紙を覗きこむように顔を俺に近づけてきた。

「ちょっ、近いから」

俺が逃げるように体を反らすと、夏目は逃さないように俺の肩を掴む。

「なになに『放課後屋上に一人できてください。待ってますから』」
手紙の内容はかなり簡潔で目的だけを伝えてきていた。名前は…、記載なし。
俺は内容を確認すると手紙を鞄に突っ込んだ。
「どうやら風紀委員に対する依頼みたいだな」
しかし俺を名指しで指定してくるのはなんの意味があるのだろうか？いまいち差出人の意図が掴めない。俺が考え込んでいると、夏目は眼を丸くして俺の顔を見つめてくる。
なんですか？緊張するのでやめてください。
「お前本気で言ってんの？」
なぜか夏目にアホを見るような目で見られる。お前にそんな目で見られるなんて少しショックだよ。
「本気も何もそれ以外になんか考えられるのか？」
他の可能性としては風紀委員に恨み持ったやつによる呼び出して集団リンチとかか？
なくはない。行くのやめようかなぁ。
「いやほら、これってラブレターとかいうやつじゃないのか？」
ラブレター？いやいやそれこそ一番ありえないだろう。っていうか屋上に来いしか

書かれていないのにラブレターに認定するなんて、意外に夏目は乙女なんだな。
俺は時間を確認し、少し急ぐように教室へ向かう。夏目も俺に合わせて歩き始めた。
夏目は俺と同じ学校の同じクラスなので当然といっちゃ当然なんだが。
「仮にラブレターだとしたら名前を書いてないのはおかしいだろ」
「うーんそうなのか？」
まあ確かにこの手紙は呼び出しの手紙としか現段階では分からないのも事実ではあるが。
「だいたい俺なんかにラブレターなんて誰が出すんだよ」
俺はぶっきらぼうな態度で夏目に質問する。
自分で言うのもなんだが、俺は世間一般で言うシスコンに分別されている。妹を大切に思うことの何がおかしいのか俺には分からないが、どうやらあまり良いようには捉えられていないらしい。
そしてそのことは周知の事実だ。別に俺は周りからなんて思われようが興味はないが、そんなやつに誰がラブレターなんて出すというのか。
俺が夏目の方をチラリと見ると、夏目は慌てて答える。
「た、確かに霞は変なやつだけど、霞のこと慕っているやつは結構いるぞ」
変なやつって、まあ自覚はあるけど身近なやつに言われると少し傷つきます。

「そうか、変なやつである俺を慕うなんて変なやつもいたもんだな」

夏目と他愛ない話をしていると目の前に三年生のAランククラスが目に映る。

先ほど天河との会話でもAランクという単語がでてきたが、うちの学園のクラスは全部で6つ（AからFまで）あり、ランク付けによりクラスが分けられている。

上位ランク「A　B　C　D　E　F」下位ランク

となっており、俺とめぐはAランクだ。ちなみに風紀委員長及び生徒会長はAランクから選抜される。

つまり生徒会長の天河もAランククラスだ。

ランク付けは別に学力だけではなく実績重視であり、部活の試合や大会で結果を多く残すと学力が最下位レベルでもAランクの可能性はある。

天河はまさにその筆頭だ。あいつの学力はかなり微妙だが、部活の大会で全国上位の成績を残しており、練習試合等でもかなりの数の実績を重ねAランククラスに所属している。

今ではカリスマ性を認められ生徒会長を務めるまでに至っているのだから大したもんだ。

俺はAランククラスの扉を開け中に入っていく。未だ教室の扉の前にいる夏目の方を確認するとなぜか目があう。夏目は俺から目をそらすようにして顔を背ける。

「あたしも…なんだけどな」
小さい声でつぶやかれた彼女の声は、クラスの騒々しい声で掻き消された。
教室で後ろから二番目であり、一番窓側にある机と椅子に俺は腰を落とす。時計の針を見ると8時27分を指していた。
ギリギリだったな。
「ありゃ？遅かったね、かすみんがこんな時間に登校なんて珍しい」
俺の目の前の席に座っている銀髪ツインテールがこちらに気づいたようだ。確かになんでこんなに遅くなったんだろうなぁ。
「また朝から揉め事でもあったの？」
まあそれもあるが。俺はちらっと鞄の方に視線を移す。
「いろいろな」
俺は先ほどの手紙を取り出し、もう一度内容を確かめる。ちゃんと確認してもやはり差出人は書いていない。
ラブレター…ねぇ。
「なにそれ？」
尋ねてくる天河の顔を見る。まあ天河ではないな、こいつは手紙なんて書かねぇだろ

うし。

俺は手紙を自分の机の上に置く。

「ああ、なんか朝下駄箱に入っててな」

天河は机の上に置いてある手紙を覗く。

「かすみんなんか約束してたの？」

「いや全く記憶にない」

「ふーん」と天河は不思議そうに顔を傾げいたが、急に何か思いついたように声を上げる。

「もしかしてそれラブレターとか」

なに？お前もなの？っていうかお前ラブレター知ってたのか。俺が失礼なことを考えていると、チャイムが学園内に響き渡った。

「もうそんな時間かぁ」

そう言い、天河は姿勢を前に正す。チャイムが鳴り終わるギリギリ手前で俺たちの担任の先生が教室の扉を開け入ってきた。

「ふぅー、なんとか間に合ったな」

息を切らしながら入ってきたボサボサの髪のおっさん。俺たちＡランククラスの担任である朝凪求得が教壇に立った。

「あー、じゃあ出欠をとる。っとその前に挨拶だな」
朝凪先生が一人の女子生徒の顔を見る。
「起立！」
彼女の言葉に従い、俺を含めた生徒たちは立ち上がり、次の彼女の言葉を待つ。
彼女の名前は依藤麻里香。このクラスの委員長を務めている。天河をライバル意識しているのかチャンスがあれば突っかかっている。
「礼！」
「おはようございます！」
「着席！」
俺たちが座ると朝凪先生が出欠を取り始める。俺はぼーっとしていると前の方から視線を感じた。
「…」
どうやら視線の正体は委員長の依藤だったらしい。俺と目が合うと佐藤はすぐに顔を前へ戻した。
なんだ？
「千種霞！」
いつの間にか俺の番まで来ていたのか、先生が俺の名前を呼んだ。

「あ、はい」
「なんだ霞ぼーっとして、好きなやつでもできたか？」
俺が少し遅れて返事をしたせいか先生がニヤニヤしながらへんな勘ぐりを入れてくる。
「違います」
俺が否定の言葉を入れても、先生はニヤニヤしたまま話を進める。
「そういうのに興味ないと思っていたが、なんだかんだ霞も高校生だな」
「いや違うっていってるんですけど？」
「まあまあ、青春を楽しむことはいいことだ」
聞く耳持たないとはこのことだな。俺は諦め窓の外を眺める。
「先生、そろそろ進めないと時間なくなりますよ」
俺が先に進めるよう促すと、先生は「おっとそうだな」と言いながら次の人の名前を呼ぶ。
やっと解放された安堵からか自然とため息がでる。
青春…ねぇ。
俺はぼーっとしながら手元にある手紙に視線を落とした。
もしこれが夏目や天河の言う通りラブレターだとしたら、いったい誰からなのだろう

か？
まあ天河と夏目は少なくとも違うだろう。手紙を見ての反応もそうだが、あの二人がラブレターなんて似合わなさすぎる。
「ちょっといいかな？」
いつの間にか近づいてきていた依藤に声をかけられ少しびっくりしたが、「なんだ？」と平然を装って返事をする。
依藤は指で廊下の外を指した。ここでは話せないことということか。
依藤が歩いて行ったため、俺はその後をついていく。廊下に出ても依藤は足を止めることなく、廊下の端まで歩いて行きそこで足を止める。
「なんだ？一限目の準備もあるし手短に頼む」
「つれないなぁ、こんな可愛い子と話せるチャンスなのに」
そう言いながら依藤は制服のポケットからＵＳＢを取り出す。
「例の件についての情報が入ったの」
俺はその言葉を聞くとさっきまでの気怠げな態度を改める。
「さすがだな。そのＵＳＢに情報が入っているということでいいんだな」
俺は食い入るように彼女に迫る。端から見たらやばい状態な気がするがそれぐらい俺は必死になってしまっていた。

「ふふっ、さっきまでとはすごい変わりようね」
依藤は俺を手で押し返して話を続ける。
「ええその通りよ。ただし渡すには交換条件があるわ」
彼女はＵＳＢを持っている手を後ろに隠し、依藤の顔がニヤリと笑った。先ほど教室で見た時と同じ顔だ。
「交換条件って、日頃お前の行いを裏で尻拭いしてるの誰だと思ってるんだよ」
依藤は「あらそうなの？知らなかったわ」ととぼけてみせる。彼女がとぼけると本当に知らなかったように見えるからやばい。
演技力だけなら依藤は校内一だろう。天川に突っかかってないでその道に行けばいいのに。
いや、今はそんなことはどうでもいい。どうやら彼女はその交換条件を飲まないと渡す気がないらしい。
冷静になれ、こういうときこそ焦ってはいけない。俺としては何としても欲しい情報だ。
「何が希望なんだ？」
俺が聞くと、彼女はＵＳＢを持っていない方の手で俺を指してきた。
「千種くん、私の物になりなさい」

彼女の要望に俺は頭を抱えた。まあ何が目的なのかは分からないでもない。風紀委員長という役職・権力を彼女は欲しいのだろう。
「それはいくらなんでも無理だ」
「あら?今なら今朝の手紙の差出人も教えてあげるのに」
唐突に出された話題に俺は内心動揺する。
「気にしてたでしょ?千種くんの珍しい一面が見れて面白かったわ」
彼女はニヤニヤしながらこちらを見てくる。俺は悔しさ半分恥ずかしさ半分の気持ちを一回咳払いをして調子を戻す。
俺が再度彼女に声をかけようとしたところで、一限目の始業のチャイムが鳴った。
ちっ、時間切れか。
俺が焦った表情をしていると、依藤がＵＳＢを俺に差し出してくる。
「ふふっ、はいこれ」
俺は何か裏があるんじゃないかと警戒しながら彼女からＵＳＢを受け取る。
「期待させてるかもしれないけど、残念ながらそれほど大した情報ではないの」
「だから今回は貸しでいいわ。あなたとは友好的な関係でいたいし」
そう言って依藤は俺の横を通り過ぎで教室の方へ歩いていく。
俺も教室へ戻ろうと歩き出すと、突然依藤が小走りでこちらに戻ってきて声をかけて

きた。
「あ、私の要望に応えなかった千種くんには手紙の差出人はおしえてあげないよ」
「いやいや興味ないから」
俺は依藤から逃げるように歩く速度をあげる。
ああ、後ろでニヤニヤしてる依藤の顔が目に浮かぶ…。

売店のおばさん「あら霞ちゃんがここに来るなんて珍しいわねぇ」
「ご無沙汰です」
俺はおばさんの言葉にメロンパンと牛乳を渡しながら応える。
あの後普通に午前の授業を受け、昼休憩の時間になったのだが、朝いろいろありすぎて忘れてたけど俺の昼飯は明日葉が持っていってる事実に気づき今に至る。
まあたまにはいいだろ。俺はおばさんにメロンパンと牛乳代の２２０円を渡す。
「はいまいど」
買ったものを袋に入れてもらい、教室へと向かうため廊下を歩いていると、後ろから「あれ？お兄じゃん」と明日葉の声が聞こえた。
振り返ると明日葉とその友達であろう女子生徒が二人でこちらに歩いてくる。
明日葉の手を見ると俺の弁当袋が握られていた。おそらく校庭で友達とお昼を取っ

ていたのだろう。
「「こんにちは～」」
　明日葉と一緒にいた女子生徒達が俺に挨拶をしてくる。俺はその返しとして軽く会釈をした。
「売店でなんか買ったの？」
　ずいっと俺に近づいてきた明日葉は俺の手に持っている袋をひったくり中身を確認する。
「昼飯用にメロンパンと牛乳をね」
「おお！ちょうどお腹すいてたんだよねぇ」
　そう言い明日葉はメロンパンの袋を開け、そのまま口に運ぶ。
　あの、さっきまでお兄ちゃんのお弁当食べてたんじゃないの？成長期って恐ろしい！
「ちょっと明日葉ちゃん？廊下でパンを食べちゃだめでしょ」
「じゃなくてそれお兄ちゃんのお昼ご飯なんだけど」
　俺が返すように催促すると明日葉は食べるのをやめ、何言ってるの？と言わんばかりの顔をする。
「お兄のものは私のものでしょ？」
　なにそのジャイヤニズム？

俺は呆れた顔をしながら明日葉が持っている俺の弁当袋を指差す。
「それお兄ちゃんのお弁当だよね？メロンパンまで食べられるとお兄ちゃんお腹空いちゃって力がでなくなっちゃうから」
明日葉は手をポンっと叩き、俺の弁当袋を返してくる。俺は渡されるがままに受けとった。
「じゃあ返すね」
軽いんですけど!?明らかにもう全部食べちゃったあとなんですけど!?
俺が納得いかない顔で明日葉を見ていると、明日葉も折れたのかメロンパンを差し出してくる。
俺が安堵の息をつくと同時に明日葉はメロンパンを無理やり口に突っ込んできた。
「ほら早くたべて」
俺は明日葉に言われ、突っ込まれたままメロンパンを一口かじる。
一口かじったのを見ると明日葉はメロンパンを自分の口に運んだ。
「おにいもうお腹一杯だよね？残すのは勿体無いから優しい私が食べてあげる」
そう言って美味しそうにメロンパンにかじりつく明日葉の顔を見せられ、俺はメロンパンを諦めるしかなかった。
「はぁ～まあいいか、せめて廊下で食べるのはやめてね？みっともないから」

俺は未だメロンパンを食べ続ける明日葉の頭をポンポンと叩いてから、仕方なくその場を去った。

「さすが噂のシスコンお兄さん…」

その様子を見ていた明日葉の友達がボソッと漏らした声が俺の耳まで届く。

あのちょっと？いつの間に一年生にまで噂されるレベルになったの？

ん？俺はふと自分の手に何もないことに気付く。そう言えば牛乳も取り返すの忘れてたわ…。

後ろを振り返るがそこに明日葉たちの姿はすでになく、「まあいいか」と俺はまた売店へ向かうのだった。

売店のところまで戻ってきた俺は商品が置いてある棚を確認する。売店の商品はほとんど売り切れていたが、まだサンドイッチ一つだけ残っていた。

「ギリギリセーフか」

俺がサンドイッチを手に取ると同時に、誰かとの手が俺の手に触れる。いつの間に近くに来ていたんだ？全然気づかなかったぞ。やはり腹がへっては戦はできぬ。

「あっ、すみません！」

相手の女子生徒が頭を下げる。別に謝らんでも…。どうやら彼女もこのサンドイッ

チが目当てだったみたいだ。っていうかこいつ。
「誰かと思ったら蓮華か」
自分の名前を呼ばれて「ん？」っと頭を下げていた女子生徒は顔を上げる。
「あっ、なんだ霞君かぁ」
「えへへ」と笑う蓮華はなぜか笑顔だ。どこぞの金髪娘を彷彿とさせるな。
蓮華は俺たちと同じく3年生である。クラスはDランククラス。彼女はいわゆる女子に嫌われる系の女子であり、そのことでいろいろ苦労している。
「飯まだなのか？」
時間的にはもう結構いい時間だ。俺は基本昼休憩に入ると少し仮眠を取ってから動き出すため昼飯の時間は少し遅い。
「ああ、うん」
彼女は一瞬目線を逸らしたが、すぐに何事もなかったかのように「あはは」と笑う。また何かあったのだろうか？
「ほれ」
俺はサンドイッチを彼女に渡す。俺も腹はへっているが、なんというか心苦しいです。
「え？でも霞君もまだなんでしょ？」

俺はメロンパン食ったしなぁ。まあ一口なんですけど…。
「いいから気にすんな、腹減った時用に予備として買っとこうと思っただけだ」
それを聞くと蓮華はサンドイッチを大事そうに抱える。それまだ買ってないからね？ちゃんとレジに持っていってね？
「やっぱり霞君は優しいね」
いやいや誰でもそうするだろう。詳しい事情はわからないが。
蓮華が売店のおばさんのところにサンドイッチを持っていったのを見届けると、俺は教室へ歩き始めた。
しかし売店から少し歩いたところで蓮華に呼び止められ足を止めると、こちらに彼女が走ってくる。
「おい、危ないから廊下は走るな」
俺が注意すると、蓮華は少し笑いながら。
「なんか霞くん風紀委員みたいだね！」
風紀委員なんだよなぁ…。俺は呆れながら彼女を見ていると、蓮華は俺の制服の裾をつまんでくる。
「サンドイッチ一緒に食べようよ」
さすが蓮華さんあざとい！俺の返事を聞く前に彼女は俺を食事スペースの机まで

引っ張っていく。
席に着くと、俺はおもむろに財布を取り出し、サンドイッチの代金を蓮華に渡す。
「そんないいよぉ」
彼女は返そうとしてくるが、「必要以上の借りは作らない主義なんだよ」っと俺は返金を拒否する。
蓮華は諦めたのか「もう…」とお金を財布の中にしまった。
その後、俺は蓮華から渡されたサンドイッチを食べながら、彼女の他愛ない話に付き合う。
食べながらと言っても、サンドイッチは各一枚しかないのですぐに食べ終わってしまったのだが。
「霞君は最近どう?」
「どうも何も、別に普通だな」
俺は先ほど自動販売機で買ったコーヒーを口に運ぶ。蓮華は「霞君は相変わらずだね」と笑いかけてくる。
「蓮華の方こそどうなんだ?まだ続いてんのか?」
続いてる。というのは彼女に対する嫌がらせについてである。蓮華は男に好かれやすい性格をしているが、その分女に嫌われる系の性格をしている。

蓮華の顔を見ると、気まずそうな表情をしている。こんなところでする話でもなかったな。

「悪い、変なこと聞いて」

「い、いや別に霞君が謝ることないよぉ」

蓮華は顔の前で両手を左右に振る。その勢いで右手に持っていたサンドイッチが手からすり抜け、勢いよく空を飛んでいった。

そのサンドイッチは道歩いていた女子生徒にぶつかり地面に落ちる。なんというミラクル。

「サンドイッチ？誰だこんな舐めたことするやつは？」

サンドイッチをぶつけられた女子生徒は声を上げ、地面に落ちていたサンドイッチを踏みつける。

俺は「はわわ」とおどおどしながら謝りに行こうと立ち上がる蓮華の腕を掴む。

「お前が行くとややこしくなるからじっとしてろ」

俺は蓮華の腕を離すと、女子生徒の方へ歩いていく。女子生徒の方も俺が近づいてくるのに気付いたのか俺の方を睨みつけてくる。

俺が立ち止まると、女子生徒も体の体制をまっすぐ俺の方に向ける。

「お前か…、一体の下のこれはなんのつもりだ？」

女子生徒はサンドイッチをふみにじりながら質問をしてくる。
「別にお前を目掛けて飛ばしたんじゃねぇんだ、ちょっとした事故みたいなもんでな、悪かった」
「信じられるか、それに謝ればなんでも許してもらえるわけじゃねぇんだよ」
どうやら女子生徒の方は納得がいってないらしい。悪いのは１０割こっちだし言い返すこともできん。
「じゃあどうすれば許してくれるんだ？」
俺が聞くと女子生徒は腕を鳴らしながらニヤリと笑う。まじこえーよ。
「そうだな、じゃあ一発本気で殴らせろ」
サンドイッチぶつけられただけでキレすぎじゃない？まあ一発でよかったと考えるべきか？
「それで気がすむんならさっさと殴れ」
俺はポッケに手を突っ込んだ体制のまま次の女子生徒の行動を待つ。
「いい度胸じゃねえか、避けんじゃねぇぞ」
女子生徒が構えると同時に蓮華が立ち上がるのが目に映る。
じっとしてろって言っといたのによ。
しかしもうすでに時は遅し、女子生徒の拳は俺の眼の前まで来ていた。

俺は正面からそれを受ける。っはずだったのだが、女子生徒の拳は俺の顔の眼の前で寸止めされていた。
「全くうごかねぇなんて、たいした度胸だな」
彼女は拳を引っ込め、嬉しそうな目をしながら口元を笑わせる。
「お前のその度胸に免じて今回は見逃してやる」
なんかよくわからんが殴られんで済んだらしい。
「そりゃたすか…」
俺がそこまで言いかけたところで、「だめぇー」と叫びながら思いっきり蓮華がぶつかってきた。
な、なぜ俺に？
俺は受け身も取れずそのままぶっ倒れる。
「霞君が痛い目に会うくらいなら私！」
「おい、そいつ気失ってね？」
俺は女子生徒の拳ではなく蓮華のタックルによって気を失ったのだった。

夢

俺が目を覚ますと、そこは真っ赤な空が一面に広がる世界だった。

「？」

俺は立ち上がり辺りを見渡すが、周りは瓦礫だらけであり、ここがどこか皆目見当もつかない。

「戦争中。っとかか？」

周囲にある建物は崩れているものや、かろうじて建ってはいるがすぐにでも崩壊しそうなものばかりだ。

どちらかと言うと戦争をして敗戦した方の国って感じだが、いくら戦争の相手国だからってここまでするだろうか？

とにかく早いとここの場を離れた方がよさそうだな。

しかしよく見ると自分が着ているものも知らない服だ。どこかの学校の制服なのだろうか？

突然のことで頭が追いついていなかったが、なんとか冷静を取り戻してきた。俺は背中に重みを感じ、何かを背負っていることに気付く。

「これは…ライフルか？」
他になにか持っているのかと体を調べるとライフルの他に拳銃も所持していた。
なんだってこんなものを俺は…って考えていてもしかたないか。
俺はとりあえず周囲を調べようと考え歩き始めるが、目指す目標がないとどうにも効率が悪い。しかし今は歩くしかないのも事実。
それから俺は歩きながら思考を巡らせていたわけなのだが、なんとなく思い出してきた。
俺は学園の廊下で蓮華に思いっきり突き飛ばされ気を失ったのだ。つまりこれは夢の中と考えるが妥当だ。
しかし妙なのは俺の夢のはずなのに見覚えがない景色だらけだ。それに意識もはっきりしている。
夢であることには間違いないだろうが、どうにも違和感を感じるな。
「だれか、助けてよぉ。パパ、っぐす。ママァ」
俺は近くから男の子の声がするのに気付いた。声の主を見つけるために周囲を見渡すと、どことなく朱雀に似た少年を見つける。
少年は泣いているようだが、なんにせよこの夢が進展を見せたのはいい傾向だ。
俺は少年に声をかけるため足を進めようとしたところで他にもうひとつ人影がある

ことに気付く。
俺は物陰に隠れながら二人を観察する。
その人影は、泣きながら歩いている少年に近づき声をかけた。
「大丈夫だよいっちゃん。困った時は私を見るの」
その少女にも見覚えがあった。おそらく少女の方は宇多良だろう。ということはもう一人の少年も朱雀で間違いないな。いっちゃん言ってるし。
しかしなぜこんなところにあの二人が?歳はみたところ幼稚園から小学校低学年くらいだろうか。
この世界は過去、なのか?しかしこんな世紀末な世界俺は知らんぞ。
ただ見ているのもあれだな、接触を図ってみるか。俺は周りに注意しながら二人に近づいていく。
俺がある程度近づくと朱雀は俺に気づき、泣き顔で俺の顔をじっと見つめてくる。朱雀の様子が変わったことで気付いたのか、宇多良も俺の方に顔を向けた。
「お前らこんなところで何やってるんだ?」
俺が声をかけると、宇多良は笑顔で「みんなとはぐれちゃったんです」と笑った。まあこいつは困ったときこそ笑顔マンだから（いつでも笑顔マンでもあるけど）こんだけ笑顔という事は困っているということか?

このわけわからん性格は小さいうちに叱っておけば治ったりするのだろうか？

「なに笑ってんだ、お前らここで死ぬかもしれねぇんだぞ」

俺が脅すよう言うと、朱雀の方は「そ、そんな、助けて、ください」と途切れ途切れで言葉をつなぐ。そんな朱雀を宇多良は「よしよし」と頭を撫でる。

「いっちゃん！困った時こそ笑顔だよ！」

宇多良は朱雀に笑いかける。だめだ治る気がしない…。カナちゃん矯正計画第一弾失敗！

ってとにかく話を進めねぇとらちがあかん。

「あー、悪かった。っでそのみんなっていうのはどこにいるんだ？」

宇多良は大きな塔を指差す。あんなのさっきまであったか？全然気づかなかったぞ。もしかして話が進んだから出現したとかか？なにそれゲームみたい。

まあいい、とりあえず目的地は決まったな。

ふと俺は手に温もりを感じた。下を見ると二人が俺の左右の手を握っている。

朱雀は泣きそうな顔で「助けて、お兄ちゃん」と声をかけてくる。それは卑怯だろう。

宇多良の方は「えへへ」と笑いかけてくる。しかし、俺は宇多良の手が震えていることに気づいてしまった。

ったく。まるで新しい妹と弟ができたみたいだ。しょうがない、お兄ちゃん頑張っ

ちゃうか。
それにどちらにしてもこの夢を先に進めるためにはあの塔に行く必要がありそうだ。
俺は二人の手をしっかり握り、大きな塔を目指し歩き始めた。

俺は今、得体の知れない生物をライフルで撃ち抜いていた。朱雀と宇多良の二人は俺の後ろにぴったりくっついて耳をふさいでいる。
「なんなんだこいつら」
地球上の生物にはとても思えない。俺に突っ込んでくるため迎え撃つ他ないのだが、なぜかそれ以外に仕掛けてくる気配もない。
目的は俺たちを倒すことじゃない？しかしそれなら突っ込んでくる理由も分からん。
それとも…。俺は後ろの二人を見る。こいつらが俺の近くにいるから攻撃できないとかか？
それにしてもこのライフル。驚くほど俺に馴染んでいる。おかしいな、俺ライフルなんて使ったことないのに。まさかこれが主人公補正!?
さっきからずっと使っているが銃弾もきれない。夢の中だからこそのご都合主義だろうか。
霞「これで最後か」

こちらに向かってくる謎の生物をライフルで撃ちぬき、俺は周りに敵影がいないか確認する。

敵の気配はない、一端はなんとかなったみたいだな。俺は後ろにいる二人に「終わったぞ」と声をかける。

「すごい、お兄ちゃん全部倒しちゃったの？」

朱雀は目をキラキラさせながら俺に羨望の眼差しを向けてくる。今の朱雀が見たら恥ずかしさで俺をぶん殴りに来るまであるな。

俺は朱雀の頭に手を置き、「おまえもいつか強くなれる。大切なものを守り抜けるように」と声をかけた。やだ中二病発症しちゃってない？恥ずかしさのあまり今すぐ現実世界の朱雀をぶん殴りに行きたい気分だ。

「ほんと？」

「きっとだ」

俺は周囲は見渡す。気になるのは先ほどの奴らだ。この世界の惨状は奴らによるものと考られるが、奴らの目的はなんだ？

だめだ、情報が少なすぎる。とにかく今は進むことを考えるべきか。

俺が歩き出すと二人ともしっかり後ろをついてくる。二人の様子は先ほどまでよりか落ち着きを見せており、不安そうな顔をみせる回数も幾分か減った、気がする。

目的地は大きな塔、そこに何があるのかは分からないが、みんなとやらのところにこいつらを送り届けるのが当面の目的だ。

少し歩いたところで自分の手を引っ張られるのを感じた。俺は後ろを確認する。手を引っ張っていたのは宇多良のようだが、宇多良の顔を見ると遠くを見ているのに気付く。

「お兄さんあれなんだろう?」

宇多良が指差す方角を確認すると、そこにはこちらの様子を見ている生物がいた。先ほどまで戦っていた謎の生物と同じ雰囲気ではあるのだが。

「人型…」

皮膚があるわけでもないし人ではないのだが、その生物の形状はたしかに人型だった。ほんとなんなんだこいつら。

警戒をしながら逃げるように後方へ下がろうとすると、その人型は手を前に突き出した。

「なにかくる?」

その瞬間周囲から敵が複数体飛び出してくる。俺は即座にライフルを構え、後方にいた敵に向かって発泡する。敵を倒したことを確認すると、俺は二人の手を掴み走り出した。

走りながら後ろを確認すると、敵の一体が体の一部を光らせている。何かしてくる気か？理由は分からないが先ほどまではただ俺に向かって突っ込んでくるだけだったが、先ほどの人型がなにかするように指示したのか？

光が収束している、まずいか？そう思い俺たちはビルの陰に隠れるように飛び込んだ。

その一瞬後、俺たちがいたところに赤いレーザービームみたいなものが直撃し、ビームの着地点が爆発する。

「おいおい、完全にやりにきてんじゃねぇか」

俺はビルから顔を出し、先ほどビームを打ってきた敵を撃ち抜く。その後すぐさま二人を物陰へ連れて行った。

「少しの間ここでじっとしてろ」

なんか蓮華につい先ほど言った気がするセリフだな。あいつは結局勝手に動いたけど。

「お兄ちゃんは？」

朱雀は震えながら俺の裾を掴む。俺は朱雀の頭に手を置き、「ちょっと悪い奴らと戦ってくる」そう言い宇多良の方へ視線を向ける。

「俺は少し離れるが待っててくれるか？」

「うん！」
　いつもの笑顔で送り出してくれている。宇多良は朱雀の手を握り、安心させるように声をかけた。
「いっちゃん大丈夫だよ、私がついてるから」
「カナリアおねぇちゃん」
　なんとなく年上っぽい立ち振舞してると思ったが、ほんとに朱雀より年上だったのか。
　とにかくここを離れねぇと敵に見つかっちまう。
「おとなしくしてろよ」
　俺はそれだけ言い、敵がいた場所へ走り出す。あの人型を倒せば道は開けるはずだ。もちろん倒せるのかは分からない。しかし試してみるしかない。
　すぐに敵影は確認できた。敵の数は全部で6体。しかしその中に人型の姿はなかった。人型のことはあとで考えよう。まずは目の前の敵だ。
　俺はビルの陰から敵を捕捉しライフルで打つ。まずは1匹目。その音でこちらの居場所に気づいた他の5体がこちらめがけて光線を放ってくる。
　しかし狙いが単調だ。俺がいるところめがけて放ってきているため少し移動するだけで回避できる。頭はあまり良くないのか？俺はすぐさま2匹目・3匹目と倒してい

く。

こうなってくると問題は人型か。やつはどこに…。

突如、俺の背後から何者かがすごいスピードで近づいている音がする。やばいと思いとっさに体を横に跳ね除ける。なにかが通り過ぎ、その際俺の頬になにかが掠れる感覚が伝わった。俺の頬からは血が滴り落ちている　。

突っ込んできた正体を確認すると、先ほどいた人型が俺の目の前に立ちふさがっていた。

お出ましか、そのままどこかに行ってて欲しかったが、そううまくはいかないようだ。

俺は人型に向かいライフル構えるが、人型は一気に距離を縮めてくる。やはり人型の方が知能指数は他よりあると見て間違いなさそうだ。俺は近づいてくる人型の腹をめがけてライフルをぶっ放す。

人型は手と思われる箇所（しかしまるで刀のような形状）で銃弾を真っ二つに切った。

「はは、まじかよ」

俺はすぐさまもう少し下に照準をずらし、今度は足をめがけて銃弾を発射する。人型は右にステップし見事にかわしてなおもこちらに突進してきた。

人型が刀のような左手を俺の首元めがけて横薙ぎしてきたため、俺は間一髪しゃがむことで回避するが、そこを周りにいた敵に狙いうちにされる。

俺は横に飛び退くことで直撃は避けれたが爆風に巻き込まれ地面を転がる。
ゴホッゴホッと咳をしながらもなんとか相手の方に体を向け警戒体制をとる。
「これまじできっつ」
またも人型が俺に突っ込んできたところで横から声が聞こえてきた。
「お兄ちゃん！」
「お兄さん…」
しまった！いつの間にかこいつらの近くまで来てしまっていたのか！
俺の状況を見て二人はこちらに走ってきてしまう。
「馬鹿野郎…」
俺は相手の方に視線を戻すと、人型は二人に気づいたのか一瞬視線が俺から外れる。
俺はその一瞬を見逃さずにすぐさまライフルで足を撃つ。
発射された銃弾はしっかり人型の足に命中。相手の動きが止まったところをさらに追い討ちをかけようとするが、またも周りの敵からビームが発射され邪魔をされてしまう。
「先にあいつらを倒さねぇとらちがあかねぇ」
だがちゃんとダメージがあるというのは朗報だ。
そうこうしているうちに二人が俺のところまできてしまった。

「お兄ちゃん血でてる！」
朱雀が俺の頬を見て心配をしてくる。俺は朱雀の顔を見て感慨に浸る。いやぁ小さい頃のお前はこんなにいい子なのになぁ、今の朱雀には面影すらないのが解せない。
「とにかく下がってろ」
視線を前に戻すと少し目を離した隙に相手はいつの間にか近くまで接近していた。
「しまった！」
俺は相手と同じミスをした自分を呪いながらライフルを構えようとするが、人型はもうすでに俺に向かって刃を振り下ろしていた。
俺はライフルを両手で持ち、振り下ろしてきた刃をライフルで受け止める。頑丈なライフルで助かったぜ。
「お前ら早く逃げろ！」
俺は目的の地である大きな塔を目線で示し、二人に自分たちだけで向かうよう指示する。この状況で二人だけにするのは抵抗があるが、ここにいるよりかは安全のはずだ。
「お、お兄ちゃん」
「いっちゃん行こう！」
宇多良は朱雀の手を取り塔に向かって走り出す。そうだ、それでいい。
俺はライフルにかかっている力を受け流すようにして相手の攻撃からなんとか逃げ

る。

人型のやつも周りのやつも二人には目もくれずこちらに警戒心を向けている。標的はなっているのは俺だけなのか？しかしそれならなお好都合か。

二人はすでに少し離れたところまで走りきっている。朱雀の方はしきりにこちらを気にしている様子だったが。

今はそんなことよりこっちをどうするかだな。

俺は後方に向かって走り出した。敵は俺をちゃんと追いかけてくれる。できる限りあいつらから離れとかないといつ気が変わるとも分からん。

追いかけてくる人型の動きは先ほどよりも鈍く感じる。足のダメージが効いてるのだろうか？

まあなんでもいい、とにかくチャンスだ。俺は振り返り人型に向かって銃弾を撃つ。ふりをして周りの敵の一匹を仕留める。

周りの敵はあと２匹。相手のビームを避けながら今度は人型の方に二発連射して足止め。次に俺は後ろではなく人型に向かって走り出す。相手は俺の行動に一瞬たじろいだように見えたが、すぐに俺を迎え打とうと刃を構えた。

そのまま動揺してくれてたらよかったんだが仕方ない。俺は走りながら拳銃を取り出し相手に顔に向かって連射する。人型は両手を顔の前に構え銃弾を防いだ。

だが今なら。俺はライフルを思いっきり人型の足元めがけて投げた。人型は顔を守っていたため前がうまく見えておらず、俺の投げたライフルを直に食らう。

もちろん大したダメージがあるとは思えないが、それでも体のバランスを崩すことには成功した。

崩れたところに俺は銃弾を人型の足をめがけて連射する。人型はたまらず後ろに後退した。

「逃がすかよ」

俺はさっきまで人型がいたところに落ちているライフルを拾いそのまま人型に向かって銃弾を発射する。人型はまだ防御体制も取れていない。

「やったか！」

フラグばりばりなセリフを吐きながらもちゃんと俺はライフルを構えたままである。

捉えたと思った銃弾は人型ではなく人型の前に飛び出してきた謎の生物二匹のうちの一匹にあたり、仕留めるのを邪魔される。やはりさっさと全部片付けておくべきだったか。

俺はさらにライフルの引き金を引いて最後の一匹も倒す。そのまま人型にライフルを向けようとするが人型はそのうちに颯爽と去ってしまっていた。

「逃げ足早すぎでしょ」

とりあえずなんとかなったか。俺は大きい溜息を一度つく。あの人型が他にもたくさんいるようなら正直これから厳しいな。

あの二人のことが心配だ。倒しきれなかった以上、あの人型の化け物が二人のところに向かった可能性だってある。

俺は塔を目指し歩き始めた。

そのあと２０分ぐらい歩くと目的の塔までたどり着いた。わりと近かったな。ここに向かう道中ではさっきみたいなやつらも何匹か遭遇したが、人型に遭遇しなかったのが幸いし特に問題なく到着した。

目的の塔の入り口はシェルターが閉じられていた。俺は近づいて調べてみるがどう開けるのか検討がつかない。

「え？これ入れんの？」

中からしか開けれない構造っぽいんですけど…。最悪俺はいいけどあの二人はちゃんと中にはいれたのだろうか？

いや、無事入れたと考えておこう。それにしてもこれからどうするか、また目的がなくなってしまった。俺は周りを見渡すが特に目立ったものがはない。

俺が悩んでいると、急に先ほどまで閉まっていたシェルターが動き始める。中の人が

開けてくれたのだろうか？とにかく助かった。このまま立ち往生しなきゃいけないかと思ったぜ。

シェルターが開くと、今度はドアが現れた。俺がドアに近づくと自動で開き始める。二人もちゃんとたどり着けてたとしたら大丈夫そうだが。

ドアが完全に開き、その先を見た俺は目を疑った。俺の頭が完全に回る前に、俺の左腕が切り落とされる。

その先にいたのは先ほど戦っていた人型の化け物だった。

「ぐうっ!?」

俺は激しい痛みに見舞われ崩れ落ちる。しかし相手は俺を待ってはくれない。すぐに第二撃が振り下ろされる前に、俺は前へ転がり込む。

ライフルは左肩にかけていたため地面に転がってしまう。

俺は右手に拳銃を構えながら頭の中を整理する。こいつがここにいるってことはこの施設はもう敵の手に落ちたということか。じゃああいつらは？

くそったれが！俺は牽制で人型に発泡しながら施設の中に逃げ込む。

施設を少し走った先からまた新たな人影が現れた。しかしそれは敵ではなく。

「君！大丈夫か！」

「はぁっはぁっ、あんたらは普通の人間っぽいが」

前から来たのは軍人の服装に身を包んだ人間だと思われる男と。
「霞君、明日葉ちゃん、必ず…必ず取り返しに来るから…」
俺のよく知る女性だった。というか母さんだった。っていうか今と全然かわらねぇ。
俺が驚いていると後ろから先ほどの人型が追いついてきた。
「君！はやくこっちに！」
俺は言われるがままに軍人さんの後ろに隠れる。
「あなたひどい怪我じゃないですか！」
俺の母親である千種夜羽は、俺の左腕がないことに気づいたのか心配の声をかけてくる。母さんって他人の心配できたんだな。
「母さんは自分の心配だけしとけばいいんだよ」
確かにめちゃくちゃ痛いけど、そもそもこれは俺の夢だ。夢なのになんでこんな痛いのか謎なんですけど。
「母さん？」
しまったぁ。俺のことを母さんが知ってるはずないじゃん。俺が訂正しようとすると母さんが俺の顔をジィ～っと見つめてくる。
「確かに顔は霞君に似てる気がするわね」
そりゃそうでしょうね、本人だもの。ってこんなまったりしてる場合じゃねぇだろ！

俺も拳銃を構え人型の迎撃に参加する。人型は姿勢を低くし完全にガード体制になっており、こちらから崩すのは難しそうだ。
「これからどうするつもりだ」
俺は牽制しながら母さんに尋ねる。母さんは少し言い淀んでいたが、しっかりと一旦ここの施設を放棄するらしいと伝える。
「この施設に知り合いの子供がいるはずなんだがどこにいるか分からないか?」
「ごめんなさい、でももうこの施設は手遅れよ。一旦引いて体制を整えてから子供たちを奪い返すしか」
子供たち。という事はあいつら以外にもここに子供がいるってことだろうな。あいつらもみんなこの塔にいるって言ってたし。
「そもそも助ける前に子供たちが殺される可能性はないのか?」
「その可能性は低いと考えられる。なぜかは分からないがやつらは子供たちに手を出してこないことが分かっているからな」
俺の質問に軍人の方が答えてくれる。確かにあの二人が無防備になっても基本俺にしか攻撃してこなかった。
完全に賭けだが、それに賭けたということか。
「他の連中は?」

「我々で最後だ」
軍人の方の銃がカチャッカチャッと空振りする音が聞こえる。
「もう弾切れか！」
え？この世界の銃って弾切れ起こすの？なにそれ斬新…。
人型の化け物はその隙を見逃さず、すぐさまこちらに飛び込んでくる。俺は拳銃を打つが片腕がないせいかうまく狙いが定まらない。
近づいてきた人型は前にいた軍人の首を一瞬で切り落とす。
さらに今度は母さん目掛けて刃を振り下ろそうとしやがる。
俺は母さんを庇うために敵との間に入り込み背中を刃で切られる。背中からは大量の血が流れ、俺は攻撃された勢いで母さんに倒れかかってしまうが、まだ倒れるわけにはいかない。
「大丈夫ですか！」
大丈夫なわけないんだよなぁ。しかし俺も男だ、大切な人の前では強がるのが性である。
「いいからはやく行って。こいつは俺が引き受けるから」
「そんな傷でなにができるというんですか!?」
「あんたはどうしても生き延びなきゃいけない理由があるんだろう」

そうこう言ってるうちにも人型はこちらに攻撃を仕掛けてくる。俺は拳銃を人型に向かって打つが見当違いのところにあたる。

止まらない人型の攻撃を避けようとするもうまく避けれず左の脇腹あたりをえぐられた。口から血が漏れる、意識も朦朧としてきた。

「母さんが逃げる時間ぐらい粘ってやる」

俺は今にも気を失いそうになる痛みを我慢しながら俺は最後の力を振り絞り拳銃を相手に構える。

「ッ!ごめんなさい霞君に似た人!」

やっと行ったか。あとはこいつの注意を引いておくだけだ。

母さんが人型の横を通り過ぎようとすると、やつもただ見ているわけではもちろんないので母さんに刃を振りかぶるが、その隙を見逃してやるほど俺は優しくはないんだよなぁ。

俺が相手の刃に弾を撃ち込んだため、人型の刃が振り降ろされる事はなかった。ちゃんと狙いのところに当たってよかった。

「おいおい俺以外のやつのことなんて考えんなよ、俺たち両思いだろ?」

人型は一瞬で俺の近くまで近づき、俺の拳銃を握っている右手を切り落とす。

なに?だるまプレイがお好みなの?ないわー超ないわー。でももうちょっと付き

合ってあげるんだからね！

俺はその状態で敵に思いっきり突進し、思いっきり敵にかぶりつく。しかし固すぎて噛みつけませんでした。

人型は俺を壁に突き飛ばす。俺はもう気を失ってしまいそうだったが、なんとか踏みとどまり壁に寄り添う形で立ち続ける。

もう体も動かせないくらい限界まできていた。俺のこの世界での役割もここまでかな？

「お兄ちゃん！」

声がした方向に視線を移動させると、そこには泣きそうになっている朱雀と宇多良の姿があった。

俺はその光景を最後に目を閉じる、その直後に俺の首は切り落とされたのだった。

ラブコメ

俺が目を開けると、そこは学園の保健室のベッドの上だった。ベッドの周りはカーテンで閉められている。体の上体を起こしぼーっとしていると、頭がズキッと少し痛んだ。俺は確か人型に首を切り落とされて…。

俺は首を触るが、首は何事もなくちゃんと繋がっていた。ふいにカーテンが少し開けられ、一人の女性が顔を覗かせる。

「あ、起きましたか？」

どうやら首を切り落とされた俺をこの人が助けてくれたらしい。首がちゃんと繋がっていることを考えると助けるだけじゃなく首を元どおりにくっつけてくれたみたいだ。そんな芸当普通の人間にできるはずがない。

「あなたはまさかネクロマンサーか!?」

「な、何を言っているの？」

保健の先生は困惑している。当たり前だけど。

「いや、変な夢を見てまして。すみません」

どうやら俺は無事夢から覚めたようだ。俺は保健室に設置されている時計を確認す

る。時間を見る感じまだ6限目の授業中のようだった。昼休みからまだ2時間も経っていないのか。

もっと長いあいだ眠っていた感覚だが、夢の時間と現実の時間には大きな差があると聞いたことがあるしおかしいわけでもないか。

俺はまたベッドに横になる。今更戻っても途中から授業を受けるってのもあれなんで6限目が終わるまでゆっくりしよう。

「あ、そう言えば友達の女の子が凄い心配してたわよ。放課後でもいいから顔見せてあげてね」

友達の女の子とは十中八九蓮華のことだろう。十中八九蓮華ってなんか技みたい。何それ弱そう。どこらへんが弱そうかって?もう蓮華って部分がちょー弱そう。今度朱雀が揉めごと起こしたら使ってやろう。

俺はベッドから立ち上がり窓の外を眺める。空は青い、雲ひとつない快晴だ。俺はちゃんと生きている世界が日常通りのことに少し安堵を覚える。これはやばいですねぇ、なんか中二病感がほとばしってる。

保健室の窓からは運動場でサッカーをしている生徒たちが見える。まあ体育の授業だろうな。運動場にいる生徒たちの中に朱雀が突っ立っているのが見えた。見た感じ一応参加はしているようだが、全くボールを追いかけようとしていない。

「あいつはサッカーのルールを知らないかな？」
　呆れた顔で朱雀を見ていると、先ほどの夢を思い出す。あの後あいつらはどうなったのだろうか？
　いやいやあれはただの夢だ、いちいち気にするなんて馬鹿すぎる。俺が頭を左右に振って雑念を払っていると、後ろから保健室の先生が「ちょっと用事できちゃったから元気になったら教室戻るのよ」と俺に伝え保健室を立ち去っていった。
　他に誰もいなくなった保健室。なんか青春ポイントっぽいよな。ここで明日葉ちゃんみたいな可愛い女の子が俺に声をかけて…。
「なんだサボりか？」
　さっそくキタァー！やはり勝確演出だったか…。どうやら保健室の外から俺に声をかけている人がいるようだ。
「人生に疲れちまってな」
　俺は保健室の外の窓に振り返りながらキメ顔でそういった。その顔を向けられた相手はうんざりした顔で口を開く。
「なに言ってるんだ貴様…」
　俺の前には呆れた顔をしている朱雀がたっていた。まあ声で気づいてたんですけどね！

「なにお前は疲れてないの？若いねぇ」
俺は保健室の窓から手を出してダランとしながら朱雀の方に声をかける。朱雀は保健室の外の壁にもたれながら腕を組んだ。俺の話し相手になってくれるようだ。
「貴様こそ俺とひとつしか変わらないのに発言がおっさん過ぎるだろう」
「ばっかお前、一年っていうのは予想以上に大きいんだよ」
特に俺たち高校生にとっては一年は本当に大事だ。たった3年間しか高校生ではいられないのだから。（留年を除く）
「それよか風紀委員長の俺の前で堂々と体育の授業サボるとはいい度胸してんじゃねぇか」
「堂々と保健室でサボってる風紀委員長がそれを言うのか」
おっしゃるとおりで、まあ俺の風紀委員長なんて役職は飾りみたいなところあるしね。俺がぼーっと運動場の生徒たちを眺めていると、朱雀がため息をついて言葉を続けた。
「俺はクラスの奴らと仲良しごっこをするために日々この学園に通っているわけじゃない」
仲良しごっこ、ねぇ。確かに高校生の友達付き合いっていうのはいろいろ複雑だ。それはまだ心が成長仕切っていない状態だからなのだろうか。高校生のうちに本当に信

頼できる友達を作ることは大切だが、その友達を簡単に見つけられるほど世の中はうまくできていない。

しかし夢の中のいっちゃんさんはあんなに良い子だったのになぁ。

「どうしてお前はお前なんだろうなぁ」

「いきなり何の話だ!?」

俺は「ははは」と軽く笑いながら流して話を元に戻す。いや俺が止めただけなんですけどね。

「じゃあいっちゃんさんはなんのために日々学園に通ってんの?」

俺の質問を聞くと、朱雀は空を見上げ遠いところを見ながら口を開いた。

「強くなるためだ。大切なやつを世の中の全てから守れるくらい強く」

強く。といっても朱雀の言う強さは単純な力のことではなく権力とかそういうことだろう。

中二病感が凄い発言だがなんとなく俺が夢の中で朱雀に言った言葉を思い出してしまう。やばい！恥ずかしすぎていっちゃんさんをぶん殴りたい気分だ…。

今はそんなことは置いておいて、朱雀の言っている大切なやつとはおそらく宇多良のことだろう。ちなみにまだ朱雀と宇多良は付き合っていないというのがなんともどかしい。

「お前いいかげんに宇多良とくっついたら?」
「はぁ!?な、なぜカナリアが出てくる!」
朱雀はあからさまに動揺しながらこちらに抗議してくるが、逆に宇多良以外に誰が出てくるというのだろうか。
「いやいやなに照れてんの、今更隠すようなことでもないでしょ」
だいたい朱雀が宇多良のことを好きなことなんておそらく周囲にいる人全員気づいてんよ。気付かれてないと思ってるお前にびっくりだよ。
朱雀は俺から顔を隠すようにして顔を下にむける。朱雀の耳は赤くなっていた、本当に照れてるんだな、可愛いとこあるじゃないの。
「俺はまだカナリアを守れるぐらい強くなれてない…、カナリアに告白するっていうのは貴様が思っているほど簡単じゃないんだ」
そんだけ相手のこと想えてるなら充分だと思うのだが、いかんせん俺もそういったことには疎い。よく分からんけど恋愛って難しいんですね。
「しかし難しく考えすぎな気もするけどな」
「貴様がそれを言うのか…。というか貴様はどうなんだ貴様は!未だにそういった浮ついた話を全く聞かんではないか!」
まあそう言った話とは俺は無縁だったからなぁ。浮ついた話は聞かないかもしれん

がシスコンどうたらはめっちゃ言われてるという。
「それはあれだ、風紀委員長だから恋愛とか禁止されてるんだよ。ほら恋愛とかってまさに風紀を乱す典型的なあれだろ」
「それなら恋愛をするように仕向けるのは矛盾していないか？」
　ほうそこに気づくとは…やはり天才か。俺は一瞬口元をニヤつかせ、少し笑顔（暗黒微笑）で口を開く。
「分かった、じゃあ今からお前も恋愛禁止な」
「極端過ぎるだろ！」
　朱雀は「ったく付き合いきれん」と怒りながら運動場の方へ歩いていく。全く、ようやく行ったか。べっ別に話し相手がいなくなって寂しいとか全然思ってないんだからね！一人の方が好きだし！
「ふぅっ」と息を吐き俺はベッドの上に腰を下ろす。恋…ねぇ。高校生にもなれば一度は経験しているもんだが、明日葉もいつか恋愛とかするんかね。今のところ俺と同じく耳にしなかったけど、明日葉ちゃんは美少女で運動もできるし勉強もそれなりにはできる。同じ学年の男子がほっておくわけがないんだよなぁ。
　鬼いちゃんが明日葉ちゃんに悪い虫がつかないようこれからはもっと警戒しないと！

俺が立ち上がり闘志に燃えていると、保健室のドアが突然開けられ一人の女子生徒が保健室の中に入ってきた。俺と目が会うと彼女はおどおどしながら俺に声をかけてくる。

「あ、あれ?保健室の先生はお休みでしたか?」

保健室にわざわざ寄ったってことは怪我でもしたのだろうか。

「休みじゃない。けどどっか行ってる」

彼女の足を見ると血が流れている。どうやら足の膝を怪我しているようだ。見た感じそこまで大した怪我ではなさそうだが…。だが保健の先生もいつ帰ってくるのか分からんし仕方ない。

俺は勝手に保健室を物色して消毒液と滅菌ガーゼ、それと包帯を取り出し机に並べる。女子生徒はそんな俺を不思議そうな顔で見ていた。

「座ってくれないと処置できないんだけど」

俺は彼女に椅子へ座るよう手で指示すると彼女は慌てて椅子に座る。俺は彼女の膝の怪我を確認する。近くで見ると結構痛そうな怪我だな。

消毒液を彼女の傷口へ垂らして、その後滅菌ガーゼを彼女の膝にあてた。「いたっ」と彼女は口で痛いのを伝えてくる。まあ消毒液が染みてるだけだろう。

「少しだけだから我慢しろ」

彼女はコクコクと頷きじっとしている。俺は滅菌ガーゼの上から包帯を巻いて、とりあえず応急処置をすませる。

「あ、ありがとうございます」

「別に大したことしてないから気にしなくていい。あとこれ応急処置だからまた先生がいる時に保健室に顔だすことな」

俺は勝手に使った道具を元の場所にしまう。時計を確認すると、もう6限目終了の時間が迫っていた。そろそろ戻ろうと思った時、後ろから「あの」と声をかけられる。

「お、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

先ほどの女子生徒がこちらに近づいて名前を尋ねてくる。俺の名前なんか聞いてどうする気だ？見たところ2年生のようだが…。まあ別に名前くらいいいか。

「千種霞だ」

女子生徒は俺の名前に心当たりがあるのか、顎に手を当て「千種…」とつぶやいた。おそらく聞き覚えがあるのはどこかで会ったことがあるとかではなく、風紀委員長だから聞いたことがあるとかだろう。

風紀委員の仕事柄生徒会ほど目立たないのはあるが、それ以上に表立っての仕事を基本的に夏目が担ってくれていることもあり、風紀委員長である俺のことをよく知らない生徒は結構いる。

ただ千種と言う苗字だけを知っているとしたらもう一つの可能性が圧倒的に高い。
「千種ってもしかして千種夜羽さんの？」
そう、クオリデ学園理事長の千種夜羽。俺の母親の名前である。理事長と言ってもほとんどこの学園にはいない。理由は分からないが家にすらたまに帰ってくる程度だ。
俺は彼女に「そうだ」と答える。彼女の表情が少しばかり強張った気がした。理事長の息子というのは普通の生徒からしたら少し特殊だ。やはり意識しないのとするのとでは違うのだろう。
「別に理事長の息子だからってすごいわけでもない、他の奴らと同じただの一生徒だ」
彼女は「す、すみません」と謝る。いや、別に謝られても困るんだが、性分なのだろうか？
「理事長の息子さんという事はあなたが風紀委員長さんなんですね。聞いてたよりも優しそうな人で驚きました」
と彼女は少し微笑む。なんだかラブコメの波動を感じる展開だな。しかし俺は風紀委員長だ、そんな簡単にラブコメに巻き込まれんぞ！
「あっ、すみません自分の名前も名乗らず…。私は八重垣青生って言います」
八重垣青生。俺はその名前を聞いて相手の顔をまじまじと見る。彼女は少しおどおどしながら「な、なんでしょうか？」といいながら顔を下に背ける。

「八重垣青生って生徒会の八重垣青生か？」
「あっ、ご存知だったんですね」
　たしかによく見ると八重垣だ。先ほどまで体育の授業だったからだろうか？八重垣は今はメガネを外していた。彼女自身生徒会では裏方が多く、あまり目立たないから俺も見たことがある程度でしか認識していなかったこともあり気付かなかった。
　八重垣は2年生のAランククラス。見た目はおとなしそうだが（実際普段はおとなしい）意外と運動神経がよくスポーツもでき、そして見た目通り勉強もできる生徒会の頼れる裏方さん。ただしなんか影がうすい。
「そりゃな、八重垣がいないと生徒会潰れるまであるし。アホの天川を支えてくれて助かってる」
　なおメガネがないと見ただけじゃ分からなかった模様。「そんな私なんて…」っと八重垣は両手を振って謙虚に否定する。
「でも天川会長をアホって言えるのも霞さんぐらいですよね」
　そうでもないと思うが、少なくとも一人言ってるやつを知ってるけど。朱雀なんとか壱弥さんとか。
　八重垣と話していると校内に授業の終了を知らせるチャイムが鳴る。いつの間にか6限目の終了の時間になっていたようだ。

「あっ、授業終わりましたね。そう言えば霞さんはなんで保健室に？どこか怪我をしたとかですか？」

体に痛みもないし怪我は多分してないけど同級生の渾身のタックルで気は失ってたな。

「まあいろいろあってな。別に怪我とかじゃない。目が覚めてからはサボってただけだ」

いっちゃんさんとお喋りしたり八重垣とお喋りしたり…、やだ俺ったらお喋り好きすぎぃ！

「風紀委員長がサボりなんてそんなことしてはいけませんよ」

やっぱり八重垣は発言が生徒会の人間って感じだな。その調子で破天荒お姫様も指導していただけると助かります。

「いやほら、適度な休息は必要でしょ？八重垣も休息とかした方がいい。なんなら今度うまい飯にでも連れてってやろうか？」

俺は言った後に後悔する。やべぇ、いつもの軽口で変なこと口走っちまった。よく知らん男と飯なんて全然休息できないし迷惑にもほどがあるだろ！八重垣も冗談だと察して流してくれればいいが…。

「ほんとですか？じゃあ楽しみにしておきますね」

しかし俺の予想とは裏腹に彼女は笑顔でかえしてきた。
えーなにこれー？なんかラブコメの波動を感じる。やっぱりラブコメの波動にはかなわなかったよ…。
「お、おう。でもあんまり期待すんなよ」
「ははは…あっ！もう戻らないとですね」
八重垣は時計を見て声を上げる。俺もさっさと戻って5限目と6限目の授業のノートを夏目に見せてもらわねぇと、今日の放課後のうちに書き写して…放課後？
そう言えばすっかり忘れていたが放課後に屋上に呼ばれてたな。
「今日はありがとうございました！霞さんとお話しできて楽しかったです！」
笑顔で言われ、若干たじろいでしまう。
「その、まああれだ。俺も楽しかった、気がする？」
なぜか最後が疑問系になってしまった。慣れないこと言うと動揺してしまってダメだな。
俺は保健室を出ようと扉を開けると、一人の女子生徒が扉の前に立っていた。まさか人がいるとは思わず俺はびっくりして「おわっ!?」と声を上げながら後ろに少し体制を崩す。
しかしよく見るとその女子生徒は蓮華だった。

「あっ、びっくりさせちゃった？」
蓮華は笑顔で俺に問いてくる。完全に確信犯じゃねぇか！俺は呆れた顔をしながら「うるせ」と不満げに答える。
「ご、ごめんって～」
全然誠意がこもってない！八重垣さんを見習ってくださいよほんと…。
俺は「はいはい」と蓮華をいなしていると俺の後ろにいた八重垣に気づいたのか、蓮華が「あれ？八重垣さん？」と反応を見せる。
「え？は、はい八重垣ですけど…」
どうやら別に知り合いという訳ではなさそうだ。まあ八重垣は生徒会役員だし蓮華も一方的に知っていただけだろうな。
「保健室に二人きりって…まさか!?」
おいこの子なんか勘違いしてる気がするんですけど!?八重垣は八重垣で「はわわ」とおどおどしてるだけだし。
「変なこと言ってるんじゃありません。というかお前は俺がここにいる原因を作った張本人ですよね？だから様子を見にきてくれたんじゃないの？」
それを聞くと蓮華は「冗談だよ冗談！」と笑った。なんか今日の蓮華おかしくないか？いや変なのは割といつもだけど、妙にテンション高いと言うか無理矢理テンションを

上げてるというか。
「でも霞くんがなんともなくてよかったよぉ」
「ああ、お前はそのあとなんもなかったか？」
まあ廊下の一件について相手方は許してくれてたはずだけど。一応念のために聞いておく。
「なんともないよぉ」
俺が「ならいい」と頷くと蓮華は「うん」と頷く。いつもの蓮華か、どうやら俺の気のせいだったようだ。
俺は時計を確認する。手紙の送り主が誰なのかは分からないが無視するわけにもいかない。
「俺ちょっと用事あるからそろそろ戻るわ。八重垣悪かったな付き合ってもらって」
「いえ、気にしないでください」
俺は八重垣に挨拶をすると蓮華にも「あと蓮華もわざわざありがとな」と声をかける。蓮華は少し考え事をしていたのか少し反応を遅らせてから「あっ、いいよいいよ！」と答えてくる。やはり少し様子がおかしい気がするが、時間もない。俺は保健室をあとにして教室に戻る。
教室に着き中を見渡すとほとんどの生徒は残ってなかったが、目的の人物はまだ教室

に残ってくれていた。夏目もこちらに気づいて「あ、サボり魔の霞だ」と言いながらこちらに近づいてきた。
「サボってねぇよ、ちょっと休憩してただけだ」
「それをサボりって言うんじゃないか？まあのんともなさそうで良かったよ」
どうやら夏目も事の顛末は知っているようだ。じゃあなんでサボってたこと知ってるんだよ…。もしかしてテレパシー使えるようになったの？夏目さんにはもう簡単に嘘つけねぇなぁ。今度から無心で嘘つけるように練習しとこ。
俺は今日の5限目と6限目のノートを貸してくれないかと頼むと「はいはい、そう言ってくると思ったよ」と自分のノートをコピーした紙を俺に渡してくる。さすが夏目さん、気がきくで賞をあげたい。
「助かる。やっぱ持つべきものは友達よりも夏目だな」
「か、からかうな！」
別にからかってるつもりはないんだがな。実際夏目にはかなり助けてもらってるし。
「とにかくサンキュな、また明日」と言って俺は教室を後にする。残る学園でのミッションは例の呼び出しだけだ。俺は急ぎ屋上へと向かった。
屋上に着いた俺は周囲を確認する。人の姿はない。どうやらまだ来ていないようだ。もしかしたらもう帰ったとか？いや、確かに放課後になってから少し時間はたっている

がさすがに早すぎる。
「気長に待つか…」
俺は屋上の柵まで行き運動場を見下ろす。運動場の端の方で陸上部がもう活動を始めていた。陸上部員のメンバーが準備体操をしているのが見えるが、その中には明日葉の姿もあった。
部活動に勤しんでる明日葉ちゃんもいいね！何時間でも見てられそう！これなら待つのも苦じゃないからやはり明日葉ちゃんはやはり天使。俺は明日葉を遠くから見守りながら「一時間ぐらいなら待とう」と決めたのだった。

それから本当に一時間経ったわけなんだが、未だに誰もこない。もしかしてイタズラだったか？よくよく考えるとそもそも依頼をわざわざ屋上に呼び出してする必要ってあると思えん。
どちらにしても一時間待っても来なかったんだ、もういいだろう。俺は屋上を後にしようと思った矢先。屋上の扉が何者かによって開けられた。ようやくきたのか？俺は屋上にきた人物を確認する。
「まさか手紙の差出人がお前だったとは!?」
次回衝撃の展開!?お楽しみに！

って続かねぇよ！

屋上にやってきたの朱雀だった。いやこれは衝撃の展開ですわぁ。俺のほんの少しのドキドキ返してくれないかな。

「何を言っているんだ？」

朱雀は屋上の扉を閉めこちらに向かって歩いてくる。俺は念のため朱雀に手紙の差出人か確認することにした。

「俺の下駄箱に手紙を入れた記憶ある？」

「は？なぜ貴様なんぞに手紙を出さねばならんのだ」

だよなぁ。まあこいつは嘘吐くタイプではないし、朱雀の言うことはもっともだ。むしろ出したって言われた方が怪しすぎる。

「じゃあなんでこんなとこに来たんだよ」

もう放課後になってから数時間経つ。わざわざ屋上にくるとかなんか理由がないとは思えんが。

「廊下を歩いていたら屋上で呑気な面を晒している貴様を見つけた」

そう言い朱雀は俺の近くの柵にもたれ、空を見上げる。俺は言葉を待つが朱雀はそのまま口を開かない。見つけたから何？お前は俺を見つけたら無条件で来るの？

「どんだけ俺のこと好きなんだよ」

朱雀は「ふっ」と失笑し「虫酸が走るからそういう冗談はやめろ」と返してくる。違いない。しかしならなぜ来たんだよ。

「なんか悩みでもあんのか？」

朱雀は先ほどみたいな失笑もなく黙ったままである。おいおいまじかよ。こりゃ手紙の差出人の犯人第一候補じゃねえか。

じゃあ朱雀が「放課後屋上に一人できてください。待ってますから」って書いたってこと？気持ちわる！っていうないない絶対ない。こいつが俺に敬語とか絶対ないから。

「別に悩みって程でもないんだが…」

俺が一人寒気を感じていると隣にいた朱雀が喋り始めた。俺は静かに耳を傾ける。こんなんでも俺の後輩だしな。

「デ、デートとかってどうやって誘えばいいんだ？」

「ファ!?」っと俺は朱雀の顔をまじまじと見る。こいつ本当に朱雀か？そんな乙女なことお前の口から聞くとは思わなかったぞ…。

「な、なんだ！」

お前がどうした？ついに壊れたか？

俺は今日の保健室での一件を思い出す。もしかしてようやくその気になったのか？

「ようやく宇多良に告白する気になったのか？」

さっきは資格がない的なことを言ってたのに。朱雀は「ち、違う！」と否定の言葉を入れてくる。
「その、なんだ、もう直ぐカナリアの誕生日でな」
「いいんじゃねぇの？誕生日に告白とかなかなかロマンチックだし」
「だから違うって言ってるだろ！」
そんな強く否定せんでも。宇多良さん聞いたら泣くぞ。たぶん。まあいいや、朱雀はどうやら誕生日に宇多良をデートに誘いたいが、誘った事がないから困ってると。でもあなたたち普段から一緒に買い物とか行ってますよね？そこらへんは心の持ちようってやつなのかね。
「俺はただ…」
「はいはい分かった。ほんと悩むような事じゃなくてびっくりだよ」
俺は朱雀の言葉を遮るように口を挟む。まあいっちゃんさんが恥を忍んで相談してきたんだ。さすがに無下にしたら可哀想か。
その後朱雀と少し話して別れた後、俺は天川に電話をいれる。
「どしたの？かすみんが電話なんて珍しいね」
それだと友達全然いない俺が誰かと電話するなんて珍しいみたいに聞こえるからやめてね？否定しきれないのが悔しいです。

「舞姫ちゃん、ちょっと俺と楽しいお話をしよう。朱雀と宇多良についてなんだが…」

そこには他人の恋路を楽しもうとしている屑の姿があった。はい、俺でした。

結局のところ手紙の差出人は誰だったのだろうか？しかし当の俺はそんなことすっかり忘れて生徒会長と楽しいお電話をしていたのだった。